

# リスト《ラ・カンパネッタ》の秘密

とっておきの練習方法と画期的な指使い



岳本 恭治

たけもと・きょうじ◎武蔵野音楽大学ピアノ科・国立音楽院ピアノ調律科卒業。英国トリニティ大学グレード・ディプロマを最優秀で取得。演奏活動と共に「ピアノ構造学・改良史・奏法史」のセミナーを行う。「国際フンメル賞」受賞。著書「ピアノ大全」他多数。現在、日本フンメル協会会長、国際フンメル協会名誉会員、国立音楽院講師。全日本ピアノ指導者協会（PTNA）正会員。



今年、フランス・リスト生誕200年という記念すべき年です。リストのピアノ曲の中で、特に人気の高いのが、《バガニーニ大練習曲集》の第3番、《ラ・カンパネッタ》でしょう。

この曲は、バガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番の第3楽章をもとに作られました。原曲にも「ラ・カンパネッタ（小さな鐘）」と表示されています。原曲は口短調ですが、リストはこれを嬰ト短調に置き換えました。ピアノの性質上、#が多く付く調は倍音の含まれ方の関係でキラキラと輝くような響きとなり、bが

多く付くと、柔らかい響きになります。#5つの嬰ト短調はキラキラ度が高く、いかにも「鐘の音」を表現するのにふさわしい調となっています。

リストは、原曲で用いられたフラジオレット奏法（指で弦に軽く触れることによって倍音を響かせる奏法）や、弓を弦の上で弾ませる奏法などを、巧みにピアノ曲に置き換えました。そして、跳躍、連打、オクターヴを伴うトリルなどを駆使して、原曲よりも鐘らしい響きの表現を随所にちりばめたのです。

## ピアノに置き換えられたヴァイオリン奏法

### フラジオレットを、両手のオクターヴで表現

冒頭



### 弦の上で踊るような弓の動きを、両手に分散することによって表現 —ヴァイオリン曲をピアノに編曲するときによく使われる手法

21～22小節目など



### 原曲よりも鐘らしい響きの表現

跳躍

4～5小節目など



連打

50～51小節目など



### トリルやオクターヴを伴ったトリル

78～79小節目など



この「跳躍」「連打」「オクターヴを伴うトリル」は、《ラ・カンパネッタ》の演奏で必要とされる代表的なテクニックでもあり

ます。次に、それらの練習方法と、演奏しやすくするための指使いを紹介しましょう。

# とっておきの練習方法

**ポイントは脱力!**

## A 脱力の準備

紐や包帯などを使って腕を吊るし、腕そのものの重さを実感する。



## 跳躍 (4~5小節目など)

(*sva*)

*p* ma sempre ben marcato il tema

〈練習方法〉

- Ⓐ 無駄な力と動作を省いて、できるだけ速く(上記 **A** の感覚を持ちながら)移動
- Ⓑ 鍵盤に軽く指先を触れた状態で待機(打鍵はしない)
- Ⓒ 打鍵

96小節目や134小節目も同様に練習する。

## 96小節目

*staccato*

〈練習方法〉

## 134小節目

〈練習方法〉

## 連打 (50~51小節目など)

(*a tempo*)  
*sva*

*sempre p*

〈練習方法〉

①

腕の付け根を十分緩ませて、肘と手首の余分な力を抜き、一気に加速度を付けて打鍵する。  
くれぐれも鍵盤の上空から叩くのではなく、軽く表面に触れてから押すこと (**A** の感覚を忘れずに)。

②

1回の打鍵の力(重さ)で2つの音符を弾き切る(Ⓐ→Ⓑ)を一息ですばやく。  
2つ目の音符を弾いたら直ちに脱力し、腕本来の重さのみをかけておく。

③

②で2つ目の音符を打鍵して脱力を十分に行った直後に、オクターヴ上の音を打鍵して、打鍵後またすぐに脱力して待機する(Ⓒ→Ⓑ→Ⓒ)を一息ですばやく。

**オクターヴを伴ったトリル**  
(79小節目など)

〈練習方法〉

- ① 1音ずつ、打鍵後に指を上げず、鍵盤に指先を密着させたまま指の力を抜く。鍵盤が元に戻ろうとする力(抵抗感、アップリフト)を逃さないようにしながら鍵盤を上げる。

- ② aの打鍵時のみに力に加え、その重みのみ(途中で力を入れずに)残りの音を一気に弾き切る。

- ③ ②と同様に。

- ④ ②と同様に。

- ⑤ オクターヴだけの音型と、楽譜どおりの音型を交互にさらう。いずれの音型でも、a ~ iの打鍵時に十分重さをかけ、トリルの音を一気に4つ弾き切るエネルギーを蓄える。次に、aとiの打鍵時のみに重さをかけ、トリルの音を一気に12個を弾き切るエネルギーを蓄える。

**画期的な指使い**

10小節目

右手で2音とも弾くとメロディラインが不鮮明になってしまうので、両手で分割する。

34小節目

片手でのオクターヴを含めた重音の連続は、手にとってかなりの負担になるので、両手に分割して、より軽快に弾けるようにする。

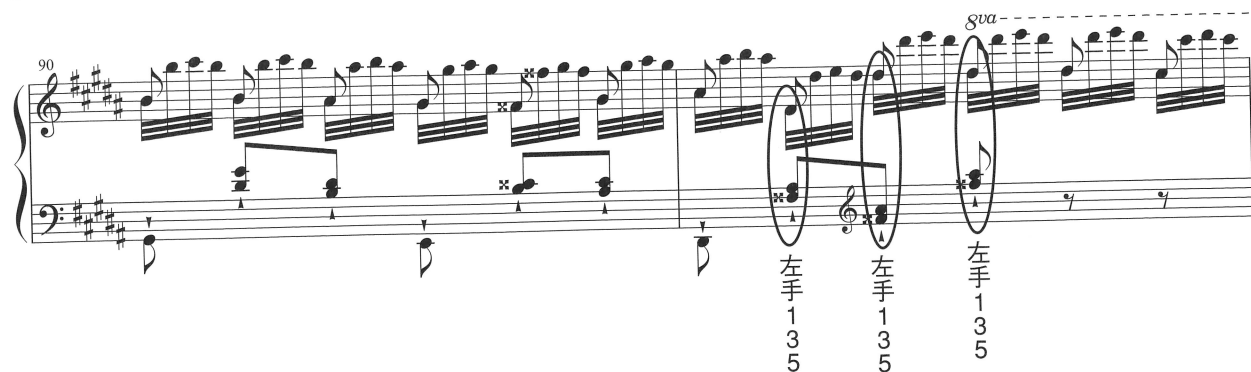
41小節目

右手で1-3-5-3-1を連続すると3に余分な力が入りやすいので、脱力しやすい5-1あるいは1-5の連続にして、軽快さを強調する(Aの感覚を維持しながら肘の余分な力を抜き、腕本来の重さをかける)。

87小節目

右手のみで弾くと4と5にかなりの負担がかかるため、それを軽減するために両手で分割する。

91小節目



右手の1がかなりの距離を跳躍しなければならないが、左手で取ると、たやすくポジション移動ができる。

97小節目



5-2-5は不安定でミスタッチをしやすい。1-2-5にすることによって、たやすくポジション移動が可能になり安定する。

**S** SCORE リスト3つの『ラ・カンパネラ』  
校訂・解説 岳本恭治  
ヤマハミュージックメディア ¥1,890

「機能」と「デザイン」を兼ね備えた究極の贅沢  
**透かし彫り譜面台**

透かし彫りにすると…  
譜面台に透かしを入れると音の反射が少なくなることで、奏者に音が聞こえやすくなり表現力がアップする等、デザイン性以外の利点もあります。

一度手に取ってみたい方は、資料や原寸サンプルの無料レンタルが可能です！  
お気軽に下記のメール・お電話にてお問い合わせください。

※イメージ画像です design by Shiori

株式会社 **総合ピアノサービス** TEL(089)971-9275 FAX(089)971-9207  
Email:piamatsu@bronze.ocn.ne.jp 詳しくはホームページを! http://www.genepis.jp/ **ジェネピス** 検索

チャイコフスキー国際コンクールで快挙  
**韓国 音楽教育のいま** 前編

韓国の音楽教育雑誌「エデュクラシック」

**イ・ヤンスク次長**  
E-Mail Interview

翻訳: 木村 理

協カール・ミン・ジンホン  
藤 拓弘 (リーラムジカ ピアノ教室コンサルティング 代表)



第14回チャイコフスキー国際コンクールにおいて、声楽部門で男女ともに1位、ピアノ部門で2位と3位など、計5名の入賞者を輩出した韓国。

K-POPに韓国ドラマ、薄型テレビに携帯電話と、快進撃が止まらない隣国。ワイドショーでその話題を耳にしない日はないと言ってもいいのに、ピアノ教育に関する情報は少ないように思う。

そこで、韓国の音楽教育雑誌、月刊「EDU CLASSIC」次長、イ・ヤンスク氏にご協力いただき、メールインタビューを実施することにした。

**驚きを隠せない  
韓国クラシック音楽業界**

韓国の人々がもっとも関心を持っているのは、芸能界やスポーツの情報です。そのような中、今回のチャイコフスキー・コンクールでの快挙に、韓国の音楽業界は驚きを隠せない、といった様子です。どうしてこのような結果になったのか、わが国のクラシック音楽業界でも、正直、未だ十分な分析ができていません。

月刊「EDU CLASSIC」では、韓国の若者がクラシック音楽で頭角を現している要因について、歴史的なひとつの流れに照らし合わせて見えています。

クラシック音楽において、作曲家の精神に忠実な作品をそのまま再現することは、非常に深奥で、その道は険しいものです。この苦行の道が、イタリアやドイツなど、

ヨーロッパを起点としているのは明らかです。この歴史的な流れは、まずアメリカへと拡がり、さらに日本や韓国へと続いているのです。

国が裕福になるにつれ、人間は辛いことを回避するようになります。辛い思いをする音楽の道を諦める人も多くなっていくのではないのでしょうか。韓国はいま、この歴史的流れのピークを迎えたように思います。

**日本との違い**

韓国には、日本のピアノ教室に相当する「音楽学院」と「ピアノ教習所」という2つの音楽教育機関が存在します。「教習所」は「学院」より規模が小さく、ピアノ指導者による個人経営の教室で、指導者は2年制以上の高等教育機関で音楽を専攻した者に限られていて、講師を採用することはできません。現在はソウルなど、ごくわずかな地域にのみ存在しています。「音楽学院」は、2年制以上の高等教育機関で音楽を専攻した者を講師に採用すれば、誰でも経営することが可能で、複数の楽器専攻コースを設置できます。通常、約50名の生徒の「音楽学院」で3名程度、約100名の生徒の「音楽学院」で4~5名程度の講師が指導に当たっています。

「音楽学院」は、1962年、ソウルに初めて「世紀音楽学院」が設立されて以来、60年に渡って続いている私立の音楽教育機関です。

現在も全国各地の音楽学院や教習所が、韓国の子ども